

北京語言大学における対外国人中国語教授法のノウハウ

杉田欣二、趙煒宏、張文青、王振宇、吳青姫、胡興華、李小捷

アブストラクト

本稿は立命館アジア太平洋大学・言語教育センターに所属する9名の中国語教員がファカルティ・イニシアティブ・プログラム（FIP）に参加し、外国人に対する中国語教育及び教授法の分野で豊富な経験を有する北京語言大学での研究調査、授業参観及び同大学・漢語速成学院から招いた専門家による講演や意見交換を通して学んだ中国語教授法ノウハウをまとめたものである。第一節では、北京語言大学における調査研究について紹介するとともに、中上級クラスでの授業参観（中上級文法・語彙授業）で学んだ中国語教授法を紹介する。第二節では、同大学への研究調査及び中上級会話授業の見学や教員との交流で会得した教学法を紹介する。第三節から第五節にかけては、招聘した専門家による講演で学んだ教授法の一部をピックアップした。詳しい内容としては、第三節で現在の言語教育形式およびリスニング能力訓練法について説明、さらに第四節で「話す技能」訓練法について紹介し、日本での適用の可能性について提案する。続く第五節では、同大学の語彙教育と文法教育の特徴や教学重点を、そして最後の第六節では、同大学の中国語教授法の経験総括及び中国語教授法の活用方法についてそれぞれ紹介する。

キーワード：中国語教授法、学習者中心型の授業、“精講多練”、言語教育形式、話す技能

はじめに

立命館アジア太平洋大学（以下 APU）に於ける中国語教育は、国内学生および国際学生（その履修者の多くは韓国、ベトナム、タイ、ミャンマー、インドネシア、カンボジアなど中国周辺の東アジア、東南アジア諸国からの留学生により占められている）を対象として行われているが、読み書きに関してはその成績が相対的に良好なのに対して、実際の会話力やコミュニケーション能力に関しては到達目標に達していないというのが現実であり、これを如何に向上させていくかが長年の課題となっている。

そこで、今回、APU の言語教育センターでは「如何に『読む中国語』から『話す中国語』へ転換させるか」という課題に取り組むべく、ファカルティ・イニシアティブ・プログラム（FIP）制度を活用し、APU と長年協力関係にあり、またこの分野で豊富な経験と実績を有している中国の北京語言大学に学ぶべく、APU の教員を派遣するとともに北京語言大学から二人の専門家を招聘し APU で講演をして頂いた。

北京語言大学は 1962 年に創立された大学で 2012 年には創立 50 周年を迎えている。創立当初より、世界中から集まった外国人に対して中国語教育を施すことに重点を置いている大学であり、これまで多くの留学生や外国企業からの研修生を受け入れてきている。その結果、過去 50 年間で世界 170 余りの国と地域から来た外国人約 15 万人が北京語言大学で中国語を学び、履修者の多くが各国の政治、経済、文化など多方面にわたって活躍している。人種、国籍、言語、宗教、文化の異なる多くの外国人履修者が集まっていることから、中国国内では「小联合国（ミニ国連）」と称されている大学である。従い、北京語言大学の豊富な経験を学び取ることは、同様にアジアを中心に世界各国から集まった国際学生ならびに国内学生に対して中国語教育を施している APU にとっても非常に有意義だと考えられる。

今回、2012 年 8 月 8 日から 11 日まで APU から張文青、王振宇、趙煒宏の 3 名の教員が北京語言大学を訪問し、同大学の漢語速成学院に於いて中上級クラスレベルの二つのクラスの授業 3 コマを見学するとともに、学院長、副学院長らと教学手法に関する交流を行った。

また、10 月には北京語言大学より二人の専門家を APU に招き、言語教育センター所属の中国語教員らを対象に 10 月 19 日、20 日の 2 日間にわたって同大学の中国語教授法に関する講義をして頂いた。招聘したのは北京語言・漢語速成学院の元学院長で中国における中国語リスニング教授法の第一人者とされる楊惠元 (Yang Huiyuan) 教授と、

漢語速成学院短期学部部長の趙秀娟 (Zhao Xiujuan) 先生の二人である。

1. 北京語言大学における調査研究について

2012年8月8日から11日にかけて、3名の教員が北京語言大学の漢語速成学院において調査研究を行った。調査内容は初中級クラスにおける授業参観、および同大学教員との交流・意見交換などである。本節では9日の授業参観についてまとめる。

【時間】2012年8月9日 8:00~9:50

【クラス名】B+クラス

【授業内容】講練課 (語彙・文法の学習)

【担当教員】王静先生

【テキスト】『説漢語』 第14課 “做什么都得有个度”

(何事をするにも度というものがある) (吳叔平著、北京語言大学出版社)

このクラスはほぼAPUにおける中国語Ⅱのレベルに相当する。使用されているテキストは、本文に声調記号だけが用いられる点において、まるごとピンイン表記を用いたAPUの中国語Ⅱ教科書と大きく異なっている。テキストのもう一つの特徴としては、単語と文法について英語で説明されているという点が挙げられる。

担任教員の王静先生によると、受講生全員が北京に来る前に一年間ほど中国語を学んだ経験があるという。13人の受講生のうち、インドネシアと韓国の学生が各1名であるほかはイタリア、ロシア、アメリカなどの欧米系の学生が殆どである。これらの学生は北京で5週間にわたって勉強する予定であり、我々の授業参観時は2週目に入ったところであった。

担任教員は授業において大部分は中国語を使用していたが、難しい単語の場合だけは英語を用いて補充説明を行っている。たとえば、“人士”という単語について、教科書は“people”と注釈しているが、担任教員は“famous people 的时候才能使用”(famous peopleの場合にしか使えない)と英語を交えながら説明した。その後の交流会で北京語言大学の教員から聞いたところ、当該学院は授業で使用する言語を原則的に中国語に限っているという。

授業は非常に双方向的に明るい雰囲気が進められている。授業の冒頭、担任教員が前日の学習内容について一問一答の形式で復習する。たとえば、前の日に“手机的功能”(携帯電話の機能)という課を学んだ場合、担任教員は学生に“除了……以外”、“随时随地”、“另外”の3つの表現を使い、“手机有什么功能?”(携帯電話の機能)の質問に答えなさいと求める。また、担任教員は、あるセンテンスの前半を言い、その後半の部分を学生に完成させるなどの授業方法を単語の復習に使っている。たとえば、“上瘾”(クセ/やみつきになる)の単語を復習するとき、教員は“抽烟会上瘾,还有什么会上瘾?”(タバコを吸うことはクセになるが、この他にクセになりそうな行為は何か?)と聞くと、学生たちは“喝酒也会上瘾”(お酒を飲むこともクセになる)とか、“喝咖啡也会上瘾”(コーヒーを飲むこともクセになる)などと答えた。このような一問一答形式のやりとりを繰り返すことで、学生はより効率的に単語を覚えることができると考える。

今回の授業参観を通して、担任教員の教科書習熟度が非常に高く、たくさんの工夫をしていることが理解できた。一例を挙げると、教員は講義前に当日の新出単語を黒板に板書する。板書は無意味の文字の並びではなく、意味的に関連性のある単語をグルーピングする方法が用いられている。たとえば、教員はまず、“迷上”(好きになり始めた)と“着迷”(夢中になる)と“有吸引力”(魅力がある)、“探讨”(検討する)と“解决”(解決する)、“规定”(規定)と“按照(規定)”((規定の)とおりと)“违反(規定)”((規定に)違反する)をそれぞれ一つのグループにまとめ、黒板に板書した。そして、教員は各グループの単語を分析し、その相違点と共通点について説明した。次に以下のような板書をした。そして、“迷上”は“开始喜欢”(好きになりはじめる)の意味を表し、“着迷”は目的語を後ろに置くことができず“A对B着迷”のように前置詞“对”によって目的語がもたらされる。一方、“吸引力”の使い方は“着迷”と逆に“B对A有吸引力”の言い方になる。」といった説明を加えた。このように意味が似ているグループで単語の用法を学習することは大変効率的であると感じた。

A 迷上了	B
A 对	B 着迷
B 对	A 有吸引力

さらに、課文の各段落の内容をまとめ、学生に復唱させた。決して教科書のままに読むことをしない。教員は一組目の単語を用いて次のような文を作成した。“我前年迷上了韩国电影。/我对韩国电影很着迷。/韩国电影对我很有吸引力。”（私はおとし、韓国の映画を好きになり始めた。/私は韓国の映画に興味を持っている。/韓国の映画は私にとって魅力的だ。）このような作文の作業を通して、学生たちはこの3つの単語の意味と用法をマスターすることができると思う。

2. 北京語言大学への研究調査及び授業参観などで学んだノウハウ

筆者は本 FIP プロジェクトの一環として、北京語言大学・漢語速成学院における「外国人に対する中国語教授法」を研究調査するため、2012/8/9（木）、8/10（金）の二日間、会話と読解の授業を見学した。その場で学んだ教授ノウハウや感心した教授法を下記のとおり紹介する。

2.1 中上級会話授業の特徴 — たくさんしゃべらせるテクニック

この中上級クラスには13人の学習者（欧米系・アジア系各半数、日本人学習者無）がいた。見学日の授業内容は“你打算去哪儿旅游?”（どこへ旅行しに行くつもり?）であった。筆者はこの授業の特徴を下記6点に集約し、会話授業の教授ノウハウとして紹介する。

(1) 問答式（“Q&A形式”）による前日の学習内容の確認

教員は前日学習した内容や知識に関する質問を投げかけ、学習者に答えさせる。そうすることで前日学んだ内容の習得状況を素早く確認することができ、しかも学習者全員に緊張感を与え、復習を促すよい方法だと思う。

(2) Q&A形式による段落別の復唱と復習

教員は本文の内容を四段落に分けて四つ質問し、学習者に本文の内容を復唱させる。こういった復習形式は、前日の学習内容の把握を促し、単語や文法、知識や文化情報といった全体的な習得状況を確認することができる。さらに、学習者は段落ごとに復唱することで、コンテキスト表現ができるようになる。この方法を通じて到達目標に向けての教員のコントロールと訓練テクニックを学ぶことができた。

(3) 学習内容をベースに自国風景を描写する応用練習

学習者に本文で学んだ表現方法を活かし、既習語彙や文法をコンテキスト表現（3フレーズ、30文字程度）に組み入れ、自国風景を描写する練習をさせる。この方法は発言する学習者の表現力を鍛えると同時に学習者全員のリスニング力や表現力を訓練し、異文化を学習することもできると考える。

(4) Q&A形式による練習問題中の慣用語や文法事項の習得度確認

総合練習問題は宿題と翌日の答え合せでもって完成し、練習問題中の慣用語の意味や使い方、重要文法事項に対しQ&A形式で習得状況を確認する。例えば、Q1：“价钱也不错”是什么意思?（“値段もなかなかいい。”はどういう意味ですか。）贵了点儿，不过这条裙子的质量就是比别的裙子好。（少し高いが、しかし、このスカートの品質は確かに他のスカートよりいいよ。）Q2：“贵了点儿”还可以怎么说?（“贵了点儿”は他にどんな言い方があるのか?）Q3：“就是”是什么意思? 还可以怎么说?（“就是”はどういう意味なの? ほかにどのような言い方ができますか?）以上の質問に対し間違った答えもあったが、学習者の集中力を維持し、思考を促し、積極的に発言させるうちに、正しい答えに辿りつき、学習した内容を深く記憶することに繋がると感じた。

(5) 学習者の積極性を活かす

発音のよい学習者の長所を活かし、リードして新出単語を読ませ、他の学習者にはそれに続いて一斉に発音させ

る。教員は正しい発音から著しく乖離している発音のみ訂正し、復唱させる。この学習スタイルは、学習者の長所を活かし、多様で楽しい学習雰囲気を作り、学習者の自信増長に繋がることが窺えた。

(6) 学習者中心型の新出単語学習及び本文内容への繋がり

新出単語の学習は既習語彙を使って解りやすく説明する教え方や、学習者の集中力をキープし Q&A 形式で応用練習する教授法を用いている。学習者が中心となる雰囲気の中で、新出単語を使いフレーズを作らせ、単語学習の最後に必ず本文の関連語句を練習させる方法である。この教授法なら単語の意味に対する理解が深められると同時に本文内容が理解し易くなり、新出単語や本文内容をほぼ授業中に習得することができると思われた。

例えば教員は“过瘾(思う存分に/堪能する)の“瘾”は「やまいだれ」の漢字で何事も“度”が必要で“度”が過ぎると“一種の病気になる”と説明し、学習者に身近に関心を持たせ、かつ本文内容に関連する語句“～瘾”→“烟瘾、酒瘾、吸烟上了瘾、喝酒上了瘾→干什么都得有个度(タバコ癖、酒癖、タバコを吸うのが癖になった; お酒を飲むのが癖になった; →何事も“度”が必要だ)”へと展開させ、語幹“～瘾”の拡張応用から本文内容へと導いていく。単語学習から応用フレーズへの練習、そして本文内容をフレーズに組み入れて練習させることで、本文に対する理解と習得はスムーズになる。

2.2 中上級読解授業の特徴—文化に対する理解を優先に

この中上級クラスの学習者は14人(欧米系・アジア系各半数、日本人学習者無)いた。見学日の学習内容は“民間流行的‘抓周儿’”(民間で流行している一歳児の“将来占いの風習”=日本の一歳児の“選び取り”)であった。筆者は授業の特徴として下記3点を感じ、読解授業の教授ノウハウを下記のように紹介する。

(1) 「読解課」で何を解決すべきか?

学習者は中国文化に対して理解がなければ文書を読んでも結局読解できないため、読解させる前にまず読解文に関する文化背景をPPTや実物を用いて説明することにしていると担当教員は経験を紹介してくれた。筆者は授業の見学を通じて、学習者が中国文化やその背景を理解すれば読解も比較的スムーズにできるようになり、理解できない個別の箇所を探し出すこともできると感じ、異文化に対する理解は読解文を読む大切なカギであることを改めて痛感した。

(2) Q&A 形式により本文に対する理解度を確認する

7分間の読解後、教員はQ&A形式で本文に対する理解度を確認する。例えば、Q1:“抓周儿(一歳時の占い)”はいつ行うのか?; Q2:“抓周儿”の方法は? Q3:“抓周儿”に使う物はそれぞれ何を意味するのか? 学習者の回答から教員は本文に対する学習者の理解度を確認することができ、また“抓周儿”という中国文化に対する理解や自分の言葉で説明できるかどうかに関しても確認することができる。即ち教え方を工夫することにより習得度と問題点を確認することができると思われた。

(3) 重要文法を系統的に学習させる

重要文法事項に関して、本文で使われた文法的意味以外の形式も合わせて紹介し、系統的な総合学習が繰り返されている。例えば、教員は絵図を用いて“除了A以外, B也/还~”(Aのほかにも、Bも~)と“除了A以外, 都B”(Aをのぞけば、いずれもBである)を板書し、基礎文法の総合学習を重視している。

北京語言大学の教員陣は教材や授業目的、授業構成、学習難点に対して熟知し、学習者主導型で常に学習者の集中力をキープし、軽快なテンポの中で楽しく学ばせ、生きた中国語を身に付けさせていると深く感心した。筆者は今回学んだ教授法を実際にAPUの中国語授業に活かすことにより一定の効果が得られるであろうと判断している。これを機に今後も教授法に関しての学習や経験交流、意見交換を続けて参りたい。

3. 現在の言語教育形式及びリスニング能力訓練法について

現在APUの中国語授業は週4回(4コマ)となっている。殆どのクラスにおいて、1回目と2回目では単語と文法の説明、3回目では本文の説明、4回目では小テストや練習を行うような段取りで授業が進められている。したがって、集中したリスニングの練習は4回目の授業で行うしかない。ところが、この時間帯には小テストなど他のタスクも

あるので、リスニング練習のための時間を確保しにくいのが現状である。加えて、各クラスが各担当教員独自のリスニング教材・教育法を使用しているため、クラス間に教授法のバラツキが存在している。限られた時間の中で、リスニングの訓練を如何に効率的に行うかは、APUの中国語教育における一つの大きな課題となっている。

今回、FIPプログラムの一環として、北京語言大学の楊惠元氏と趙秀娟氏を講師としてAPUに招へいし、リスニング、文法、会話、検定試験など様々な角度から中国語の教授法について講演をして貰った。このうち、楊惠元氏は10月27日(土)の10:00から12:30の間、中国語のリスニング訓練法について講演された。以下にその講演内容をまとめる。

楊惠元氏は講演の最初に、語学学習の四大基本能力(聞く、話す、読む、書く)の中で最も重要であるが学習効果が最も現れにくいのは「聞く」能力であると強調した。また、初級レベルでは「聞いて分からない」ことが最優先に解決すべき課題であるとも指摘した。「インプット→アウトプット」という言語習得順序において、「聞く」がインプットの重要な手段の一つだからであるという。楊惠元氏は教員に次のような3つの資質を高めることを強く求めた。

- (1) リスニング能力訓練の重視
- (2) リスニング訓練理論の研究
- (3) リスニング訓練法の改善

また、楊惠元氏は「聞く」能力を次の8つに下位分類している。実際の教育現場では、一回の授業ですべての下位能力を訓練するのではなく、このうち一つの能力について集中的に訓練すべきだという。

- (1) 聞き分ける能力
- (2) 記憶能力
- (3) 連想能力
- (4) 真似る能力
- (5) すばやい反応能力
- (6) 聞きながら覚える能力
- (7) 検索能力
- (8) まとめる能力

このうち、(1)の聞き分ける能力について、楊惠元氏の具体例を以下に挙げる。

3.1 聞き分ける能力の練習方法

(1) 教員はまず、舌尖音のz-と巻舌音のzh-を黒板の左右に板書する。次に、この中から、一つを任意に選んで発音する。学生は発音を聞いて、z-が発音された場合は左手を挙げ、zh-が発音された場合は右手を挙げる。

(2) 教員は意味もしくは発音が近い複数の単語を読み上げる。学生はその中で意味的に異なるものを聞き取る。たとえば、「大、小、不、好」(このなか、「不」だけは副詞である)や「学习、练习、休息、消息、复习、预习」(このなかで「消息」だけは名詞である)などの単語グループが例として挙げられた。

3.2 連想能力の訓練方法

- (1) 教員はある単語の意味を中国語で説明する。学生は説明を聞いて、どの単語に関する説明かを答える。
- (2) 教員はある中国語の単語を言う。学生はこの単語と意味的に関係する単語を列挙する。たとえば、教員が「水果」(果物)と言ったら、学生は「苹果」(リンゴ)、「香蕉」(バナナ)、「橘子」(ミカン)、「水果店」(八百屋)などと答える。
- (3) 教員が文の前半を読み上げ、学生にその文を補完させる。たとえば、
教員：今天星期三，明天……？(今日は水曜日、明日は?)
学生：星期四。(木曜日)
- (4) 教員がある長い文章を読み上げ、学生に文章を補完させる。

4. 「話す技能」訓練法について

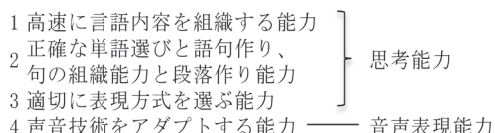
本節の目的は、北京語言大学の楊惠元教授の「話す技能」訓練法に関する講義の内容を要約することを通じて、本学における初級学習者の会話技能をいかに高めていくべきかについて検討し、今後話す能力を生かしていくための課題を提示することである。具体的には楊教授の講義の内容をまとめたのち、その方法を本学の教学にどう生かしていくべきかに関して検討し、いかに場面对応能力をもつ学習者として育てていくべきかに関して触れることにする。ここでは、初級学習者を対象とした中国語の例文を提示する。

楊教授は講義で話すための教育を行う目的、原則、重点、方法の四つに言及した。

まず、話すための教育を行う目的として次の四点が挙げられる。第一に、できるだけ多くの語源要素を学習者に投入できるように、そしてそれが経験要素として脳で記憶のデータベースとなって調整および取出しができるように助長することである。第二に、積み重なる言語情報の投入と取り出しを通じて口頭表現のマイクロ技能のトレーニングとコーディングの熟練度を高め、運動性の言語中枢を刺激することである。第三に、発音器官の訓練を通じて外部に正確に言語信号を発信することである。第四に、話す主題が明確であり、内容がまとまっており、理論整然として筋が通っており、正確な表現で文が自然になるようにすることである。

次に、話すための教育の原則は交際性の原則、対象性の原則、「精講多練」の原則、「五不離」の原則、刺激性とコントロール性の原則を指している。交際性の原則は、交際目的から出発して指導的な会話訓練を通じて交際能力の目的を達成することである。対象性の原則は、学生の難点と苦手な学生を対象とした指導を意味する。「精講多練」の原則は、教員が最も簡単な方法で説明したい内容を深くかつ徹底的に、はっきり説明をすることである。学生は大量に、繰り返し、充分かつ効果的に練習することを通じて知識と技能を把握することができる。「五不離」の原則とは、音は字から離れず、字は単語から離れず、単語は文から離れず、文は段落から離れず、段落は篇を離れずという原則のことを指す。刺激性とコントロール性の原則とは学生に話す欲望を与えて練習の難易度をコントロールすることである。

図1 口頭表現のマイクロ技能



それから、話すための教育の重点は学習者が知識の蓄積と経験成分を吸収できるように指導することである。もう一つは口頭表現のマイクロ技能をトレーニングすることである。ここでいう「口頭表現のマイクロ技能」とは左の図1に書いてある思考能力と音声表現能力を指す。

最後に、話すトレーニングは話すことをメインに、聞いてから話し、読んでから話し、話すことと書くことを結合した総合トレーニング方法である。これらの具体的なトレーニング方法に関しては後述する。以上が講義の内容であるが、ここで改めて「話すこと」とは何かについて考えてみると、まずは言いたい内容を考え→相手が理解しやすい伝達表現を考え→実際に音声を出して相手に伝えるといった三つの過程の組み合わせであり、まさしく楊教授の講義で取り上げている思考能力と音声表現能力の結合体である。

では、楊教授による指導法をいかに本学の授業に応用すべきか？楊教授は特に話すトレーニング法の詳細に関して、「学生の思考にインスピレーションを与えて言語潜在能力を開発する」方法として5つの例を挙げて細かく紹介しているので、以下ではそれぞれのトレーニング方法を簡単に纏めながらカテゴリ別に本学の初級学習者への適用可能性を検討する。

(1) 一つの質問に対して多数の回答を得る方法

単語を思い出し、文法知識に基づいて組み合わせる能力を生かす方法であり、より長い文を作っていくための基礎づくりでもある。また、本学の教学でも適用している方法であり、その実践の具体例をあげると、

例) 問: 你去图书馆做什么?

答: 我去图书馆看书、看报纸、看电影、做作业、做功课……

(2) 雪だるま式に文を拡張する方法

短い文を多数繋いで文を徐々に拡張していく方法であり、論理的思考能力が求められるため、順序良く文を繋い

でいく必要がある。当方法は上記①の「一つの質問に対して多数の回答を得る方法」のトレーニングの延長線として考えることができる。本学でも実践している方法であり、その具体的な実践例をあげると、

我今天下午五点下课。

我今天下午五点下课。下课以后我去食堂吃饭。

我今天下午五点下课。下课以后我去食堂吃饭。今天不回家做饭。

我今天下午五点下课。下课以后我去食堂吃饭。今天不回家做饭。下星期考试，我得学习…

(3) 虫食い式会話文を完成していく方法

表現が抜けている括弧付の会話文を与え、知っている語彙と文法規則を考えながらそれぞれの語句と会話全体を完成していく方法である。上記の(1)と(2)の知識があることが望ましい。本学の教育でも適用している方法であり、以下がその具体的な実践例であるが、より多くの場合には教科書の例を参照にグループでアイデアを出して新しい会話文を作り上げていく方法である。

例)A: 这儿有()。这是谁的呢?

B: 是不是()? 我现在有课。你()?

A: 好, 那()。现在我去()顺便()。

B: 那, 太()! 对了()。

A: 嗯, 好的。()。

(4) 記述式の作文をカテゴリー別に分ける方法

当方法はセンテンスの組織力と段落構成の練習であり、記述式の作文をカテゴリーとして段階的に分ける方法である。現在APUで使用しているテキストは会話形式であるため、会話を文章化するトレーニングは行っていないもその逆のケースはあまり行ってないため、今後当方法を取入れることが積極的に検討されてよい。

(5) 記述文を会話文に直す方法

記述文を会話文に直すトレーニングである。一定の長さの記述文を読んで、会話文を組織していくトレーニングである。当方法は上記の(4)の「記述式の作文をカテゴリー別に分ける方法」と同様に今後積極的な検討の余地がある。

以上が今回の講義で取り上げられた話すトレーニング方法である。話すことは語学学習の頂点であり、学習者が論理的かつ適切に話せるように教育していくことは教える側にとっても最終的課題である。筆者はかつてコミュニケーション能力養成のステップを紹介する中で本学における中国語Ⅰの初級レベルの学習者にとって最も必要なのは基礎知識(語彙・文法など)を総合的に伸ばしてコミュニケーション能力の土台となる会話能力を上げていくことであると発言した。話せるようになるためには、当然ながら本節で挙げているような基礎能力が必要となる。しかし、初級から中級や上級に進むにつれて語彙や文法能力よりも社会言語能力や談話能力、ストラテジー能力といった思考能力が必要になってくる。

社会言語能力とはどのような場面にどのような表現を選ぶべきかといった能力であり、談話能力とは会話を開始、継続、終了、ターン展開するといった談話管理能力であり、ストラテジー能力とは困った場合への対処能力を指している。特に、単語が思い出せなかったり、相手の言うことが理解できなかったり、自分が言ったことを相手がよく理解できなかった場合へのストラテジー能力が強い場合にはその他の能力が弱くてもコミュニケーション能力を達成できることが先行事例で知られている。本節で挙げてきた基礎会話能力に加えて、これらの思考的言語能力をいかに学習者に伝授していくべきかが我々すべての中国語教員の重要な研究課題であろう。

5. 北京語言大学の語彙教育と文法教育について

5.1 語彙と文法教育の基本原則

(1) “精講多練”の原則(簡明に解説し、たくさん練習させること)

“精講”には二つの意味が含まれている:一つは内容である。即ち、話す内容は必ず緻密に選び抜かれたものでなければならない、しかも少なくして精練されたものであるべきだということである。二つ目は方法論である。即ち、

教師は最も少ない言葉と最も簡単な方法で話すべき内容をはっきりと解りやすく説明すべきだということである。

また、“多練”には三つの意味が含まれている。一つ目は説明時間と練習時間の比率であり、少なく話して多く練習するということ。二つ目は全面的練習で、練習すべき内容は必ず徹底して練習し、漏れがあつてはいけないということ。三つ目は十分練習するという事で、学生は多く、繰り返し、効果的に練習することによって語彙と文法を掌握することができる。

(2) コミュニケーション能力を培うことを中核とする原則

コミュニケーション能力を培うことに重きを置き、まず固定練習から始め次に活用練習へと移行する。学生のためにさまざまな活動を設計し、彼らに学んだ単語や文法を使わせ、さまざまなコミュニケーションの任務を完成させる。

(3) 教育の段階を易しいものから難しいものへと進む原則

教師は学生の実態から出発し、科学的に教材を処理し、教育内容の分量や難易度をコントロールし、浅いところから深いところへと段階を踏んで一步一步進めなければいけない。

(4) 教育方法に柔軟性と多様性を持たせる原則

“教育には方法があるが、定まった方法はなく、方法を得ることが重要”である。実際の教育活動に於いては、一定の教育目的を実現するために、教師は教室内の教育活動を入念に設計し、柔軟性をもって最も優れ最も効果的な方法を選択しなければならない。

5.2 語彙教育

5.2.1 語彙教育の原則と要求

(1) 教育を分類する原則

語と語の間のさまざまな組み合わせや重合（集合）関係を利用し、語彙教育を行い、学生が語彙の範疇をはっきりさせ語彙の量を拡大するのに役立て、学生が理解しやすくまた記憶しやすくさせる。

(2) 系統性の原則

教育の過程は系統性を保持しなければならない。教育を組織し、新出単語を復習し、その解説や演習ならびに応用をすることから始まって、宿題の手配や授業前の予習に至るまでそれぞれがしっかりと繋がるように前後を調整し自然に移行するようにして、全体の語彙教育をひとつの有機的な総体に統合していく。

(3) 文化の原則

語彙教育のなかで関連する中国の文化的背景を滲ませることに重きを置き、学生が新しい単語を学習すると同時に中国の文化を理解し、自国の文化と比較するようにさせる。特に中国の歴史や文化に関連する語句についてはそれが重要である。

5.2.2 語彙教育の常用的方法

(1) 字句の意味解説における常用的方法

字句の意味解説で常用される方法には次のようなものがある。

- a. 翻訳法。英語あるいは学生の母語と正確に対応する翻訳の字句に対しては、時間と労力を省き、回り道を回避することができる。特にゼロからスタートする初級学習者に対しては適宜この方法を採用することができる。
- b. 直説法。語彙の意味が単一明快であれば、実物の教材や図あるいは身振り手振りではっきりと示すことができる。
- c. 語素法。単語を語素に分解し解説する。語素を分析することによって学生によりよく語彙の意味と合成語の造語規則を理解させる。
- d. 語意関連法。字句の間の各種の重合・組み合わせ関係を利用し、語彙の展開学習を行う。
- e. 比較法。この種の方法を語彙教育のそれぞれの領域に適用することにより、各種の間違いや正しい語音、字形、意味の比較をすることができる。
- f. コンテキスト法。解説することや理解することが難しい単語は、適切なコンテキストを示すことによって学生

が理解把握し易くすることができる。

(2) 字句演習の常用的方法

字句演習で常用される方法には次のようなものがある。

- a. 拡張的置き換え。拡張性の強い字句については特に拡張練習をし、字句の組み合わせをさせることが重要である。
- b. 問答法 (Q&A 形式)。集中問答と個別問答に分けることもでき、字句の解説や復習においては非常に多く用いられる。
- c. 選択穴埋め法。類義語の比較や字句の組み合わせに用いるのに適している。例えば量詞 (助数詞) の組み合わせ、動詞+目的語の組み合わせ、補語の組み合わせ、介詞 (前置詞) の組み合わせなどである。
- d. 字句の形・音・義習得を強固にする練習方法。例えば新出単語を聞いて書き取ること、ピンイン (拼音) の識別、類型字 (形が似通った漢字) の識別や組み合わせ、字句の類義語や反義語の提示、字句のしりとり (リレー) などである。
- e. 学生が用法を掌握するのを助ける方法。例えば字句の言い換えや字句の言いつなぎ、情景描写の練習等である。

5.3 文法教育

5.3.1 文法教育の基本原則と要求

- (1) 言語の比較により文法の重点と難点を突出させる

中国語と学生の母語の文法を比較することにより、両者の異同を明らかにし、その中の相違点を文法教育の重点と難点にする。

- (2) 文法解説の簡略化という原則

文法の解説は“簡明に解説し、たくさん練習させる”という原則に則って、学生のレベルにあわせて簡単明瞭に要点を押さえて行うことが肝要であり、過度に複雑に説明する必要はない。学生には大量の演習を通してその中から徐々に理解させ掌握させていく。

- (3) 文型から入り、文型練習と文法知識を帰納結合させる

文型は文法教育における重点中の重点であり、文法教育は主要な文型を提示し学生に理解させ、文法の要点を簡明に解説したのち学生に反復練習させるということに帰納すべきである。

- (4) 文法構造の教育と語義、用法、機能の教育を結合させる

文法構造を解説すると同時に、学生にはどのような文法の機能があるのか、どのような場合に使うのかを説明し、学生の誤用を少なくすることが重要である。

- (5) 学生の文法の誤りを矯正し、誤用に対して分析をする

文法教育はそれぞれの国別学生が犯しやすい文法の誤りを見つけて総括することや病巣がどこにあるのかを分析することに重点を置き、適切な方法で学生に矯正を施すことに重点を置くべきである。

5.4 文法教育の常用的方法

5.4.1 文法の導入に関する常用方法

文法教育は中国語教育の重点であり且つ難点でもある。適切な導入方式は効果的に教育効果を高めることができる。よく見られる導入方法には以下のようなものがある。

- (1) 復習法：比較的複雑な文法は徐々に学生に紹介していく。毎回の授業ではまず前回の授業の内容を復習し、その後、新しい内容を紹介する。順序立てて少しずつ進め、学生には徐々に消化させる。
- (2) 動画法：教師は比較的複雑な文法に関しては、動画で見せる教材として入念に設計し、生き生きとしたイメージとして学生に提示することができる。

5.4.2 文法解説の常用的方法

文法の解説は簡潔明瞭であること及び解説の方式や方法を工夫することが要求される。よく見られる主な方法には

次の三つがある。

- (1) 例文解説法：適切な例文を入念に考え、学生にははっきりしたコンテキストのなかで理解を深めさせる。
- (2) 総括帰納法：その文法の若干の異なる状況を帰納し、学生が識別と運用をし易くなるようにする。
- (3) 翻訳法：英語あるいは学生の母語と正確に対応して翻訳させる方法に焦点を当てることにより、文法教育の効率を大々的に高めることができる。

5.4.3 文法演習の常用的方法

文法演習は“簡明に解説し、たくさん練習させる”原則のなかの最も重要な部分であり、教室内教育の重点でもある。学生に多く練習させ演習の効果を高めるために、教師は異なる方法を柔軟に設計しなければならない。常に用いられる演習方法には主に次のようなものがある。

- (1) 問答法：学生にグループ或いは単独で関連する文法問題に回答させる。
- (2) 置換法：学生に語義が関連する或いは似通った文法の置き換え練習をさせることにより、理解を深めさせる。
- (3) センテンスの言い換え法：ほかの文法を使ってセンテンスを言い換えさせる。例えば「“把”を使った構文」を「“被”を使った構文」に書き換えさせることなどである。
- (4) 図を見てセンテンスを言わせる方法：学生の実際の運用能力を検証することができるだけでなく、授業を豊富且つ活発なものにすることができる。
- (5) 情景によりセンテンスを作る方法：ひとつの適当なコンテキストを与え、学生が関連する文法を使って表現できるように導く。

6. 北京語言大学の中国語教授法の経験総括

北京語言大学の前身である北京語言学院は1962年に創立され、中国で最も早く留学生向けの中国語・中国文化教育に取り組んできた。現在、50の国と地域の280の大学、教育機関と提携を結び、総合的、効果的でハイレベルな教育を提供すべく、その枠組みを構築している。北京語言大学の傅惟慈、李培元、王還らの教授陣は、早期に外国人向けの中国語教授法を確立した。現在語言大学は『言語教学与研究』、『世界漢語教学』、『中国文化研究』など中国語教育関係の学術刊行物を出版するほか、北京語言大学出版社より中国語学習者用教材を数多く出版しており、それらは100近い国と地域の中国語教育機関の現場で使用されている。

このような歴史の中で講師陣がさらにそれぞれ教授法の研究に取り組み、そのもとで初級、中級、上級各レベルの留学生が学んできた。ここでは中国語教育に実績のある語言大学の授業の進め方の特徴を簡単に紹介してみたい。

6.1 学習者中心の授業

外国語教育に限らず、授業は教える側が中心となって進められることが多い。しかし、語言大学では、早くから学習者中心の授業が行われてきた。教える側は一方的に講義をするのではなく、学習者が積極的に発言できる環境を整え、雰囲気を作り、学習者の意欲を引き出し、集中力を維持させる。リラックスした状態で集中することは、学習効果を大いに高めるものである。このように授業を進めていくためには、事前にしっかりと準備をすることのほかに、教える側のコミュニケーション能力が必要となってくる。国も文化も習慣も違う学習者の中で、教師たちがどのように柔軟に対応し、学習者が道を大きく外れないように導いていくかは、学習者中心の授業を作る上で重要なポイントとなる。教師がうまく授業をコントロールし、学習者の信頼を得ることができなければ、学習者中心の授業は成立せず、学習目標も達成できないということを考えれば、教師たちにはそれなりの人となりや技術、柔軟性が要求される。よって北京語言大学の教師育成では、以上の点も合わせた育成プログラムが組まれている。

6.2 発音重視の外国語教育

北京語言大学では一貫して学習者に正しい発音を身につけさせることに力を注いできた。これは、どんなにすばらしい表現を身につけても、発音やアクセントの問題で相手に理解してもらえなかったり、自身の発音に問題があることがリスニング力を高める際の障害になったりすることがあるからである。

母語が違えば学習ポイントも異なるため、北京語言大学ではかつて学習者一人ひとりに発音記録ノートが作られ、それぞれの学習者に合わせた指導を行い、発音を矯正していた。現在では、これらのノートから得た様々なデータをもとに発音指導のシステムが構築されたため、このようなノートは作られておらず、初めから学習者の母語を考慮した教育が行われている。

6.3 単語レベルでの表現力強化

外国人向けの中国語教育で文レベルの文法教授を行うことは当然であるが、中国語は孤立語であり、一つの単語が形態上の変化なしに複数の品詞を持っていることが多々ある。例えば“出租汽车”は前後の文がなければ、「タクシー」とも「車をレンタルする」ともとれる。このような点を学習者が理解、習得できるようにするには、文レベルでの文法、句型指導のほかに、単語レベルでの表現を強化するための指導も必要である。目的語と共起できる動詞、共起できない動詞の使い分け、述語になれる形容詞となれない形容詞の違いの理解などがその類である。語言大学ではこのような単語レベルでの文法の指導にも力を入れ、文レベルでの文法へと繋げている。

6.4 教材における本文の位置づけ

日常的に使われる表現と、教材の本文に使われる表現は必ずしも一致するものではない。しかし、本文には学習項目が典型的かつ代表的な表現で巧みに織り込まれている。文化的要素も盛り込まれたこれらの表現を習得することにより、学習者はより正しくより自然な中国語を身につけることとなる。

また本文の種類は多岐にわたり、聞く力、読む力、話す力、書く力の全てがバランスよくレベルアップしていくよう工夫されている。

6.5 授業の流れ

授業は、新出単語の読みと説明から始まり、文法項目の説明と例文の理解、本文の読解、練習、まとめ、宿題の説明と続くが、それぞれは独立したのではなく、学習者にその関連を示しながら次の段階へと進んでいく。

新出単語の学習では、読みの練習と説明のほかに、単語と単語を組み合わせてフレーズを作る練習を行い、そのフレーズをさらに文にしていける。このような十分な準備を経たのち、本文に入ることによって、学習者は本文の意味が理解しやすくなる。

表現を定着させるための反復練習も授業の中で行う。授業内で角度を変えて復習することにより、既習の表現を知識から実用へと広げていく。

6.6 教授法研究の研究成果

早期に確立された語言大学の中国語教授法は時代の流れとともに改良が加えられ、また第二言語習得とかかわる言語学、心理学、教育学など各分野の要素も取り入れた研究が現在に至るまで続けられている。出版物の例を挙げれば、以下の通りである。

王還(1987)、『門外偶得』、北京語言学院出版社

呂必松(1991)、『華語教学講習』北京語言学院出版社

呂必松(1993)、『対外漢語教学研究』、北京語言学院出版社

崔永華、楊寄洲(1997)、『漢語課堂教学技巧』、北京語言文化大学出版社

劉珣(1997)、『対外漢語教学概論』、北京語言文化大学出版社

魯健驥(1999)、『対外漢語教学思考集』、北京語言文化大学出版社

程美珍(2009)、『漢語病句分析九百例』、華語教学出版社

ここで北京語言大学の中国語教授法を全て紹介することはできない。詳しくは本稿の第1節から第6節及び上記の書籍をご覧ください。

中国における中国語教育と外国における中国語教育に違いがあることは確かであるが、実際には共通する部分が

多い。よって今後も北京語言大学は海外に向け情報を発信し、全国各地域の中国語教育機関と連携し、意見交換することで、自身の教授法にもさらに磨きをかけていこうとしている。

おわりに

今回の北京語言大学との交流を通じて、APU 言語教育センターの中国語教員は多くの知識を吸収し共有することができ非常に有意義であった。語学教育に限らないが、単に厳格に教育するだけでなく、如何に履修者に対して中国語を学ぶ楽しみを感じさせ、彼らをして自主的に予習復習を行い、クラス内で自発的に中国語による意見の発表や質問を行おうとする雰囲気を作り出すことが大切かということを感じ取ることができた。それは即ち、履修者が中国語学習の楽しみを実感し、また継続的に学習することによって常により高い達成感を味わうことができるよう動機付けを確実に行っていくことが教員の側に求められているということでもある。

今回の交流は、それぞれの段階別到達目標の策定や授業の進め方、ならびに試験問題の出題傾向等に関して非常に参考価値の高いものであった。APU 言語教育センターでは、今回の交流を契機として、今後、APUにおける中国語教育に関して段階別の目標設定の見直しと明確化を行い、それに基づいて、教科書についても新鮮さや面白さ、興味深さを重視し、且つAPUで教える中国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの合計4段階の中国語の系統性、連続性も考えあわせて選定しなおす作業に着手していきたいと考える。

付記：本稿の執筆者は本研究プロジェクトのメンバーである。杉田欣二が「はじめに」と「おわりに」及び全体の編集を、王振宇が第一節、張文青が第二節、李小捷が第三節、呉青姫が第四節、胡興華が第五節（原文中国語、翻訳杉田）、趙煒宏が第六節をそれぞれ執筆した。

このプロジェクトは、北京語言大学・漢語速成学院からの多大な協力を得て実施することができた。中国語教員一同、心より感謝申し上げます。